九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

六朝期における「三都賦」以後の都城賦の展開について

栗山，雅央
九州大学大学院人文科学府 ： 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1498237

出版情報：中国文学論集. 43, pp.21-30, 2014-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

六朝期における「三都賦」以後の都城賦の展開について

栗山雅央

西晋の左思が著した都城賦である「三都賦」は、「洛陽の紙価をして貴からしむ」る程の流行現象を見せた。これほどに流行した作品であれば、他の文人がこぞって類題の作品を作ってもよさそうである。しかし、東晋以後の都城賦の著述状況を見てみるに、その作品数は決して多くはない。このことについて程章燦氏は、元来類書的性質を備えていた都城賦が類書編纂の流行により、辞賦作品の主題としては徐々に淘汰されていったこと、東晋以降は都城や宮殿を称讃できるほどの安定した王朝が出現しなかったこと、そして常に過去の作品を凌駕する必要に迫られるという大賦そのものが持つ性格の三点から、考察を行っている。[1] この程氏の説には、なお再考の余地が残されるように思われる。そこで本稿では、改めて「三都賦」が完成してから、すなわち東晋以後の都城賦の展開について、六朝期に限っての分析を行うとともに、そのおおよその背景について考察を行うことにする。

一　「三都賦」以前の都城賦

「三都賦」以後の都城賦の展開を考察するに先立ち、「三都賦」に至るまでの都城賦の系譜を確認することにする。まず前漢において司馬相如「子虚上林賦」があらわれる。これは正確には都城賦ではないが、複数篇から構成され、かつ架空の人物の対話によって作品が展開される点で、後世の班固「両都賦」や張衡「二京賦」、左思「三都賦」に繋がる作品としてひとまずは位置付けられる。ついで揚雄の「蜀都賦」がある。これは蜀の出身である揚雄

が故郷の風俗や物産を喧伝した作品であり、所謂都城賦と呼ばれる作品の嚆矢である。[2] 後漢には班固「両都賦」が作られ、これと同時期に傅毅「洛都賦」「反都賦」、崔駰「反都賦」、杜篤「論都賦」が残され、その後は張衡「二京賦」「南都賦」が作られる。三国時代になると、徐幹「斉都賦」が現れ、また劉楨「魯都賦」、劉劭「趙都賦」「許都賦」「洛都賦」があり、西晋になって傅玄「正都賦」と左思「斉都賦」「三都賦」が著されることになる。[3]

このように見た場合、作品の構成と内容によって三種類に類別が可能である。構成は単篇或いは複数篇で区別でき、内容は都城賦の性質上、都城描写や風俗物産を描き出すのは当然であるが、そこに王朝に向けた称讃或いは諷諫といった政治的態度が表明されたかで区別できる。このような基準に照らせば、複数篇で政治的態度の表れない作品は現在は残らない。ついで複数篇で政治的態度が表明されるものとしては、司馬相如「子虚上林賦」、班固「両都賦」、張衡「二京賦」、左思「三都賦」が該当する。単篇で政治的態度が表明されるのは、傅毅「洛都賦」「反都賦」、崔駰「反都賦」、杜篤「論都賦」、劉劭「許都賦」「洛都賦」、傅玄「正都賦」が当てはまる。[4] 最後に単篇かつ政治的態度が表明されないものとして、揚雄「蜀都賦」、張衡「南都賦」、徐幹「斉都賦」、劉楨「魯都賦」、劉劭「趙都賦」、左思「斉都賦」が該当する。

以上の分類に基づけば、漢代は主に単篇と複数篇の別に関わらず、政治的態度の表明を伴った作品が著される傾向にあり、三国以降になると徐々に揚雄「蜀都賦」に倣った単篇かつ政治的態度の表明がみられない作品が増加するようになる。これら三国時代の作品はいずれも文人自身の出身地を作品中に詠み込むことを特徴とし、その題目も「(出身国) 都賦」とされるのが殆どである。この時期にも政治的態度を表明する作品は幾つか残されてはいるが、当時の都城賦の主流を構成していたとは言い難い。

このような状況にあって、西晋の頃に班固「両都賦」や張衡「二京賦」に倣い、複数篇かつ政治的態度を表明した「三都賦」が出現したことは画期的である。「両都賦」や「二京賦」が主に中原一帯を主な描写範囲にしたのに対して、「三都賦」は揚雄「蜀都賦」にも描かれる、地方や辺境を叙述対象とした点も注意すべきであろう。また、「三都賦」はこれ以前の都城賦には見られなかった王朝の交替を、禅譲描写を通して初めて描き出した作品でもあった。これらの点において、「三都賦」はそれまでの都城賦の要素を包括し、発展させた作品であると言える。

二　「三都賦」以後の都城賦

「三都賦」以後の著述状況に対する程章燦氏の分析は本稿の冒頭で述べた通りである。程氏は「三都賦」を京都宮殿大賦の系譜に位置付け、東晋以後の同系譜に連なる作品を列挙している。まず東晋では、曹毗「魏都賦」「冶城賦」「揚都賦」（以上、『全晋文』巻一百七）、庾闡「揚都賦」（『全晋文』巻三十八）を、劉宋では夏侯弼「呉都賦」（『全宋文』巻二十九）、斉では孔逭「東都賦」（『南史』巻七十二孔逭伝）、梁では呉均「呉城賦」（『全梁文』巻六十）を挙げる。一方、北方の北魏では梁祚「代都賦」（『魏書』巻八十四梁祚伝）、裴景融「鄴都賦」「晋都賦」（以上、『魏書』六十九裴延儁伝附裴景融伝）、高允「代都賦」（『魏書』巻四十八高允伝）、裴伯茂「遷都賦」（『北史』巻三十八裴延儁伝附裴伯茂伝）、陽固「北都賦」「南都賦」（以上、『魏書』巻七十二陽固伝）を挙げている[5]。これらの作品数から判断するに、都城賦が東晋南北朝期を通して流行した題材ではなかったことは事実であったと言えよう。

ここで、東晋以後の都城賦作品を前節にみた分類に当てはめれば次のようになる、まず、「三都賦」や「二京賦」のような複数篇で構成され、かつ政治的態度が表明された作品としては、陽固「南都賦」「北都賦」二篇が挙げられる。その内容は、『魏書』巻七十二陽固伝から推測できる。

尚書令高肇以外戚權寵、専決朝事。又咸陽王禧等並有釁故、宗室大臣、相見疏薄。而王畿民庶、勞弊益甚。固乃作南北二都賦、稱恒代田漁聲樂侈靡之事、節以中京禮儀之式、因以諷諫。

尚書令 高肇 外戚たるを以て権寵せられ、専ら朝事を決す。又た咸陽王禧等並びに釁故有り、宗室 大臣、相ひ疏薄せらる。而るに王畿 民庶、労弊益す甚だし。（陽）固乃ち南北二都賦を作り、恒代の田漁 声楽 侈靡の事を称し、節（ただ）すに中京 礼儀の式を以てし、因りて以て諷諫す。

「南都賦」「北都賦」はすでに散逸しており、現在では本文の確認はできない。しかし、『魏書』の記述からは、陽固が外戚の専横や王侯の反目による人民の疲弊を憂い、諷諫の意を込めて著したことがわかる。これが北魏の孝文帝による洛陽遷都以後、宣武帝の頃に作られたであろうことに鑑みれば、「南都賦」は洛陽を対象とし、「北都賦」は平城を対象とした作品であったと推測される。この点において、「両都賦」や「二京賦」に類似した作品であった

と言える。一方で、単篇の作品が多数を占めることに気付かされるが、それは政治的態度を作品中に表明したものが中心であったと推測される。以下に具体例を示しつつ検討する。まずは庾闡の「揚都賦」を挙げる。

子未聞揚都之巨偉也
左滄海　右岷山
龜鳥津其落　江漢演其源
喝金摽乎象浦　注桐柏乎玄川
昔句吳端委　延州儷臧
高讓殆於庶幾　英風亞乎穎陽
土映黃旗之景　蠻白紫蓋之祥
巖栖赤松之館　岫啓縉雲之堂
龍符渙而夏德興　羣神萃而玉帛昌也
天包龍軫　地奄衡霍
玄聖所遊　陟方所託
我皇晉之中興　而駿命是廓
靈運啓於中宗　天網振其絶絡

子 未だ揚都の巨偉なるを聞かずや。
左に滄海、右に岷山あり。
亀鳥 其の落に津まり、江漢 其の源に演す。
金摽を象浦に喝し、桐柏を玄川に注ぐ。
昔 句呉 端委あれば、延州 儷に臧し。
高讓 庶幾に殆く、英風 穎陽に亜ぐ。
土は黄旗の景に映え、蠻は紫蓋の祥に白し。
赤松の館に巖栖し、縉雲の堂に岫啓す。
龍符 渙かにして夏徳 興り、群神 萃まり玉帛 昌かなり。
天は龍軫を包み、地は衡霍を奄ふ。
玄聖の遊ぶ所にして、陟方の託す所なり。
我が皇晉の中興、駿命 是れ廓なり。
霊運 中宗を啓き、天網 其の絶絡を振るふ。

（〔東晋〕庾闡「揚都賦」『芸文類聚』巻六十一居処部総載居処）

題目からは都城を称揚する賦であることがわかるが、より具体的には東晋王朝の帝都建康を称讃したものであろうと推察される。例えば「左に滄海、右に岷山あり」とは、皇帝の視点からの表現であり、直接には東晋王朝の皇帝に向けて作られた作品であることがわかる。また「我が皇晉の中興、駿命 是れ廓たり」と述べるのは、東晋王朝の天命に対する最大の賛辞であり、ここには庾闡の東晋王朝を宣揚せんとする意識が明瞭に看て取れる。「揚都賦」と題する作品は曹毗にも残されており、『晋書』巻九十二曹毗伝には、

又著揚都賦、亞於庾闡。

又た「揚都賦」を著して、庾闡に亜ぐ。

と見え、恐らくは庾闡「揚都賦」と類似した内容であったのであろう。これらはいずれも当該王朝の称讃というかたちで、自身の政治的態度を表明したものであった。また、高允「代都賦」も『魏書』巻四十八高允伝に、

允上代都賦、因以規諷、亦二京之流也。

允「代都賦」を上り、因りて以て規諷す、亦た二京の流れなり。

とあり、高允が諷諫を目的として「代都賦」を奏上したことがわかる。ここで作品の題目に挙げられる「代都」とは、孝文帝が洛陽遷都を行う前の帝都であった平城を指す。具体的な内容は明らかではないものの、皇帝に対して奏上したものであり、かつ諷諫の意が込められたとあることからは、この作品に政治的態度が込められていることは確かである。同題の作品は梁祚にも残されている。彼に関しては著述の経緯が明らかではないが、梁祚と高允とがほぼ同時代に活動したことから[6]、高允「代都賦」とほぼ同様の内容であったと推測される。更に、裴伯茂「遷都賦」についても、著述経緯が『北史』巻三十八裴延儁伝附裴伯茂伝に見えるので確認する。

伯茂好飲酒、頗渉疏傲。久不徙官、曾爲豁情賦。天平初遷都、又爲遷都賦。

（裴）伯茂 飲酒するを好み、頗る疏傲に渉る。久しく官を徙らず、曽て「豁情賦」を為る。天平の初めに遷都す、又た「遷都賦」を為る。

これは、北魏が東魏と西魏とに分裂した際のことであり、直接には東魏王朝による洛陽から鄴都への遷都時を指す。この時期に「遷都賦」を著したことから、彼の政治態度が作品中に宣言されていると考えてよい。東晋以後の都城賦作品の多くは単篇であり、かつ作品中に文人自身の政治的態度が表明された作品であると言える。

ここで改めて、先に示した程章燦氏の分析内容を確認したい。程氏は類書の増加を都城賦衰退の最大の要因とするが、これには疑問がある。類書的性質は「三都賦」や「二京賦」などにも認められ、都城賦と類書との間に一定の関係性があることは間違いない。しかし一方で、類書の編纂と都城賦の著述とを関連させた場合、程氏の指摘が必ずしも当てはまらない場合も存在する。後漢末の建安年間においてである。建安年間には三曹七子を中心とした建安文学が行われたが、この時に最初の後世の所謂類書である『典論』が曹丕によって編まれている。この時期に

は例えば、徐幹「斉都賦」や劉楨「魯都賦」があり、明帝の頃には劉邵「趙都賦」が残る。徐幹と劉楨は建安七子に数えられ、曹丕と極めて近しい関係にあった。[7] このように、類書編纂の流行が都城賦創作の衰退へと直接には結び付かない場合も存在する。そもそも都城賦の類書的性質は、袁枚が『随園詩話』巻一の中で次のように指摘したものであった。

古無類書、無志書、又無字匯、故「三都」「両京」賦、言木則若干、言鳥則若干、必待搜輯羣書、廣采風土、然後成文。果能才藻富艶、便傾動一時。洛陽所以紙貴者、直是家置一本、當類書・郡志讀耳。

古（いにしへ）は類書無く、志書無く、又た字匯無し、故に「三都」「両京」賦は、木を言ふは則ち若干、鳥を言ふは則ち若干、必ず群書を搜輯し、広く風土に采るを待ちて、然る後に文を成す。果たして能く才藻富艶なれば、便ち一時に傾動す。洛陽の紙貴き所以の者は、直（た）だ是れ家に一本を置きて、類書・郡志に当てて読めるのみ。

袁枚はここで確かに都城賦の類書的性質を認めるが、その対象として挙げられるのは左思「三都賦」及び張衡「二京賦」である。これらの作品を先の分類に当てはめれば、いずれも複数篇かつ政治的態度を表明する作品群に属している。つまり、袁枚の指摘を直ちにすべての作品群に当てはめることは難しいのである。程氏はこれら都城賦を区別することなく一括りに京都宮殿大賦として扱うが、やはり区別して論じる必要があろう。かかる理解に基づけば、東晋南北朝期の都城賦創作の衰退、或いは変化には更なる要因が介在するのではないかと推察されるのである。

三　都城賦の伝統への回帰

東晋以後の都城賦の多くが単篇かつ政治的態度の表明を伴う作品であったことは前節に確認した通りである。これに極めて類似した時期を他に見出すことができる。後漢の頃、班固が「両都賦」を著し、ついで傅毅や崔駰、杜篤らによる諸作品が相次いで発表された一時期である。東晋以後の都城賦は、複数篇で政治意識が確認できる左思の「三都賦」が作られた西晋時期や、徐幹「斉都賦」や劉楨「魯都賦」といった単篇かつ政治態度が表明されない作品が中心であった建安年間ではなく、都城賦の系譜においては初期とも言える段階へと回帰しているのである。

では、何故このような現象が生じたのであろうか。例えば「三都賦」は、西晋王朝の建国まもなく、いまだその権力基盤が確立されていなかった泰始八年（二七二）から太康二年（二八一）にかけて、左思の不断の努力によって完成を迎えたが、この時期はまさしく西晋王朝がみずからの権力確立に邁進した時期であった。太康元年（二八〇）に達成された平呉はこれを象徴する事件であるが、左思はこの一大事件に対して機敏な反応を見せ、かつ自身の態度をも表明してみせる。平呉について、「魏都賦」（『文選』巻六）の中で左思は次のように述べている。

757 揆既往之前迹　卽將來之後轍　　既往の前迹を揆り、将来の後轍に即く。
成都迄已傾覆　建鄴則亦顚沛　　成都 迄に已に傾覆し、建鄴 則ち亦た顚沛せん。
顧非累卵於疊棊　焉至觀形而懷怛　　顧た卵を疊棊に累ぬるに非ざるも、焉んぞ形を観て怛を懐くに至らんや。
權假日以餘榮　比朝華而菴藹　　権も日を仮りて以て余栄あり、朝華に比して菴藹たり。
覽麥秀與黍離　可作謠於吳會　　「麦秀」と「黍離」とを覧れば、謠を呉会に作るべし。

ここで左思は、魏国先生の口を借りて蜀漢の滅亡と孫呉のまもなくの平定とを詠うが、これはまさに左思による西晋王朝の正統性を主張したことの所産であった。更に、西晋王朝がその権力基盤の確立を目指し、平呉へと邁進していたがために表現できた内容でもある。このように、「三都賦」をめぐる著述活動は、当時の社会政治状況を強く反映して行われたものであった。これは班固や張衡においても同様である。となれば、東晋以後の都城賦も、それぞれの時代で文人が置かれた社会政治状況を注視する必要があろう。東晋以後における文学創作は、南北の地域差が与える影響差が重大であろうと考えられ、まずは東晋南朝期の都城賦創作の背景を考察する。

太熙元年（二九〇）に武帝司馬炎が崩御して以降、西晋王朝は徐々に滅亡への兆しを見せ始める。武帝の息子である司馬衷が帝位を継ぐと、直ちに外戚である楊駿による専権が開始されるが、翌永平元年（二九一）には恵帝の后である賈皇后による粛正が行われる。その後は司馬氏の宗室による衝突が繰り返され、八王の乱が勃発する。恵帝崩御の後は懐帝、愍帝と続くが、北方の非漢民族による侵入を許し、永嘉五年（三一一）の洛陽の陥落、建興四年（三一六）の長安の陥落により西晋王朝は滅亡する。そして、太興元年（三一八）に江南の建康において司馬睿が即位し、東晋王朝が建国される。その後は永熙二年（四二〇）に劉裕へと禅譲を行い劉宋王朝が建国されていく。(8)

以上、西晋王朝の滅亡から東晋王朝の建国、そして劉宋王朝の建国の過程で、各王朝の領土は大きく変化することになった。西晋王朝が八王の乱やこれに伴う北方異民族の進入により滅亡を迎えた際、西晋王朝に属した多くの人士は長江を渡り、江南の建康へと移り住んだ。そして東晋王朝が建国されたが、建国当初の最大の目標は中原の回復にあったとされる。これは桓温が幾度となく北伐を行い、一度は洛陽を回復していることからも明らかである。しかし南渡以降、元来は北方出身であった人士たちの多くが二世三世と徐々に世代交代するにつれ、避難民であった北方人士の土着化が進むようになる。その結果として、天下の中心を中原ではなく、現王朝が位置する江南と認識するようになったとされる。これは東晋に続く劉宋時代である元嘉二十七年（四五〇）に、北伐に失敗して中原回復の可能性が極めて低くなった時期に顕著なものとなる。[9] つまり東晋南朝に限れば、いまだ中原回復の可能性が存在した東晋時期には洛陽を本来の帝都と認識する文人も多かったため、庾闡は「揚都賦」で殊更に江南を讃美し、中原を中心とする天下観を持つ人士に反論したのであろう。一方、土着化が進み中原回復が王朝としての目標として認識されなくなった劉宋時代以後は、北方を殊更に意識する必要がなくなり、中国の南北に位置する都城或いは王朝を対比した都城賦を著す必要がなくなったのではなかろうか。つまり、文人の意識が後漢の頃と同じく、自王朝の領土内のみを作品の対象とするようになったと推測される。これは、劉宋時代以後に残された作品が、夏侯弼「呉都賦」、孔逭「東都賦」と少なく、かつ単篇から構成されることからも窺われよう。

対して、北魏の頃に著された諸作品は、先に確認したように張衡「二京賦」に見られるような諷諫を中心とするものであった。更にその著者に着目すれば、その殆どが漢族の出身であった。[10]

太武帝が華北を統一してすぐの頃は、漢族士大夫は胡族政権である北魏王朝の正統性を認めていなかった。そのため、その政治へも積極的に関与することはなかった。ところが、漢族出身で時の宰相であった崔浩が太武帝の太平真君十一年（四五〇）に誅殺されるのを境に、徐々に北魏王朝に正統性を認める意識が芽生え始めたとされる。[11] 北魏時代に著された都城賦は、殆どが漢族士大夫に拠るものであり、かつ崔浩の誅殺以後、漢族士大夫の意識に変容が見られてからの作品である。これらの状況に鑑みれば、北魏王朝の正統性を容認するようになった漢族士大夫が積極的に政治に関与するようになった結果として、漢賦が持つ諷諫の精神に注目し、漢代都城賦に倣ってこれら

の都城賦を著したと言えるのではなかろうか。彼らが江南に位置する南朝の漢族政権を都城賦の対象としないのも、北魏に仕える漢族士大夫の意識のあらわれであると理解できよう。

以上、「三都賦」以後の都城賦の展開とその背景について考えたが、東晋以後の都城賦は、自王朝への政治態度の表明が中心であった。ここに南朝文人の北朝に対する、北朝文人の南朝に対する意識は殆ど確認できない。東晋以後の都城賦は決して衰退による所産ではなく、三国西晋時代を越え、班固らが盛んに著述活動を行った後漢の頃に立ち戻った作品であり、言うなれば伝統的漢代都城賦へと回帰したものと考えるべきであろう。ここからは、都城賦の系譜に照らしての「三都賦」の異質性が、おのずと浮かび上がる結果になったと言えるのではなかろうか。

注

（1）程章燦『魏晋南北朝賦史』（江蘇古籍出版社、二〇〇一年）第五章第三節「「三都賦」騁辞大賦最後的輝煌」を参照。

（2）揚雄「蜀都賦」の内容分析及び文学史上の位置付けについては、嘉瀬達男「楊雄「蜀都賦」と都邑賦」（『小樽商科大学人文研究』第百二十六輯、二〇一四年）を参照。

（3）『芸文類聚』巻六十一居処部総載居処には、揚雄「蜀都賦」、班固「両都賦」、張衡「二京賦」「南都賦」、杜篤「論都賦」、崔駰「反都賦」、傅毅「洛都賦」、徐幹「斉都賦」、劉楨「魯都賦」、劉劭「趙都賦」、左思「三都賦」、傅玄「正都賦」と、西晋以前の都城賦を採録する。一方、東晋以後のものは庾闡「揚都賦」を収めるのみである。

（4）杜篤「論都賦」が長安側の意見の代表であったことは、岡村繁「班固と張衡――その創作態度の異質性――」（『小尾博士退休記念中国文学論集』第一学習社、一九七六年）を参照。また、傅毅や崔駰の「反都賦」が「両都賦」への反論であったことは鈴木修次『漢魏詩の研究』（大修館書店、一九六七年）第三章第二項「建安詩の題材と賦」を参照。

（5）程章燦氏前掲注（1）著を参照。程氏はここで宮殿賦も含み、東晋以後の宮殿賦を総計十二篇挙げるが、都城賦とはその構成や内容において異なるため、本稿では具体的考察対象とはしない。また、呉均「呉城賦」は都城賦ではあるものの、都市の荒廃に関する描写が中心となり、「三都賦」との直接の関係性よりも鮑照「蕪城賦」との関係性が強

い作品であると判断され、本稿では考察対象から除外する。

(6) 『魏書』巻四十八高允伝に「時中書博士索敞與侍郎傅默、梁祚論名字貴賤、著議紛紜。允遂著名字論以釋其惑、甚有典證（時に中書博士索敞 侍郎傅默、梁祚と名字の貴賤を論じ、著議 紛紜たり。允遂に名字論を著し以て其の惑を釈し、甚だ典証有り）」とあり、両者の交流が確認される。

(7) 劉楨と曹丕との関係については、吉川幸次郎「三国志実録 曹植兄弟」（『吉川幸次郎全集 第七巻』筑摩書房、一九六七年）、伊藤正文『建安詩人とその伝統』（創文社、二〇〇二年）第Ⅰ篇第四章「劉楨伝論」に詳しい。徐幹と曹丕との関係については鈴木修次前掲注（4）を参照。

(8) 福原啓郎『西晋の武帝司馬炎』（中国歴史人物選第三巻、白帝社、一九九五年）第六章「恵帝（上）」、第七章「恵帝（下）」、第八章「懐帝と愍帝」を参照。

(9) 戸川貴行「東晋南朝における天下観について――王畿、神州の理解をめぐって――」（『六朝学術学会報』第十集、二〇〇九年）、同「東晋南朝における伝統の創造について――楽曲編成を中心としてみた――」（『東方学』第百二十二輯、二〇一一年）を参照。この中で戸川氏は、東晋南朝時期の人士によって江南の地を天下の中心とする新たな天下観が創造されたこと、そしてこのような天下観の醸成に伴い祭祀儀礼を中心とした新たな伝統が創造されたことを論じるが、このような意識の変化が文章創作の場にも影響を及ぼしたと考えても何ら不思議ではない。

(10) 北朝期における都城賦の著者の出身を『魏書』に基づき示せば以下の通り。梁祚、北地泥陽人。裴景融、河東聞喜人。高允、勃海人。陽固、北平無終人。裴伯茂は『魏書』に伝記が残らないが、『北史』では裴景融の一族として記載があるため、河東聞喜人であると判断される。

(11) 川本芳昭『魏晋南北朝時代の民族問題』（汲古書院、一九九八年）第一篇第一章「五胡十六国・北朝時代における華夷観の変遷」（初出、「五胡十六国・北朝時代における胡漢融合と華夷観」、『佐賀大学教養部研究紀要』第十六巻、一九八四年）を参照。